

建築家中原暢子設計「木村別邸」からみる設計思想

深石 圭子

中原暢子（1929-2008 以下、「中原」という）は、戦後の女性建築家として活躍し、和風と機能主義の融合を求めた。筆者は、中原の独立後の設計思想の展開を4期に分け、第1期とは機能主義、特に構造表現主義的傾向が強い時期として捉えた。この時期の代表作として「長覚院」、「辻別邸」及び「木村別邸」がある。これまで「木村別邸」については、これまで実地調査が行えなかったが、今回の調査で他の作品にみられない和風と機能主義を融合させる様々な野心的な試みがあったことが確認できた。

「木村別邸」は、構造表現主義的なデザインを抑制し、内部のインテリアとしてのみ露出している。茶室は当初は織部床から始めたが、実現したものは様式にこだわらない自由な茶室となった。他方、食堂には、伝統的な囲炉裏自体を再現、細部の装飾には、家紋、吊下げ灯籠、木碑等の「伝統的和風要素」をそのままの形態で各所に配置し、響き合わせる和風装飾空間として存在させた。

キーワード：木村別邸 中原暢子 技術 装飾 伝統

1. はじめに

中原は、戦後に女性三人で建築設計事務所である林・山田・中原設計同人（以下、「設計同人」という）を立ち上げ、活躍した建築家の一人である。本学の専任教員も勤めた経験を持つ。「木村別邸」（図1）は、中原の44年に渡る設計同人での活動の中で初期の作品に当たる。中原の公表された作品は、現在明らかになっているものだけで142作品中22作品と少ない。



図1 「木村別邸」外観（竣工時）

「木村別邸」は、「トラス構造の家」、「K別邸」等として建築系雑誌3件（『室内』（1966.1）、『建築文化』（1966.10）、『住宅建築』（1976.6））に各々複数のページにわたって掲載されているが、その他に現時点で先行研究はみられない。また、中原を紹介する雑誌の寄稿などのプロフィール欄には、作品に「木村別邸」と記載されているのみがみられる（『建築文化』（1986.10）、『建築雑誌』（1996.3）等）。さらに、本学の退職記念の発行した「中原暢子の木造住宅設計図集」にも巻頭に本作品が掲載されている。中原没後の平成24年に開催された独立行政法人国立女性教育会館主催の企画展示「建築と歩む～チャレンジした女性たちからチャレンジする女性たちへ～」では、パオニアの一人として中原が紹介されており、代表作として当模型が展示された¹⁾（図2）。以上より、「木村別邸」は、中原の代表作の一つであると位置付けることができる。

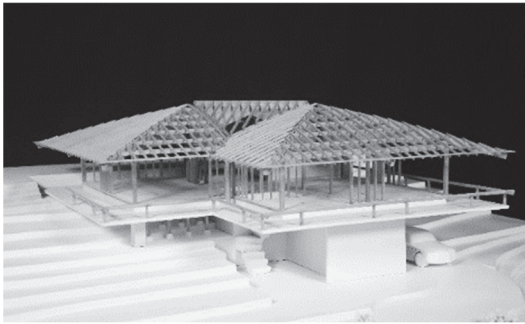


図2 建築構造模型（部分）

中原の作品の中で、重要な「木村別邸」については、これまで現地調査を行うことができなかったが、今回、それを行うことができた。そこで、新たに明らかになったことをここにまとめる。

2. 「木村別邸」の概要

2-1 概要

中原が設計した「木村別邸」は、埼玉県入間郡毛呂山町瀧ノ入に1966年4月に建築された。東南に傾斜した敷地に立ち、木造の平屋の一部が地階であり、下層にある階段から上階上がったところに玄関が位置している（図3）。設計当時の家族構成は、夫婦+子供3人で、別邸となっているが、病身の子供の療養を目的としている。

屋根形状は、半径21.25mのむくりのある約8mの方形2つをオーバーラップさせた形で構成されており、その交差した下部には、囲炉裏が位置する。西を除く外周部には、鉄筋コンクリート製のデッキが片持梁で廻っている。

敷地面積は、1,740㎡、建築面積は、163.80㎡、延床面積は、1階と地階を合せて122.31㎡である。しばらくの間、住民が不在の時期があったものの現在の持ち主に大切に管理され、竣工当時と大きな変更はなく使用されている。

2-2 設計の経緯

中原は、この「木村別邸」の設計に取り掛かる前の1963年に国際女性建築家会議（UIFA）第1回大会フランス（パリ）に出席し、そのまま9ヶ月もの間、現地のインターンアーキテクトとして参加している。

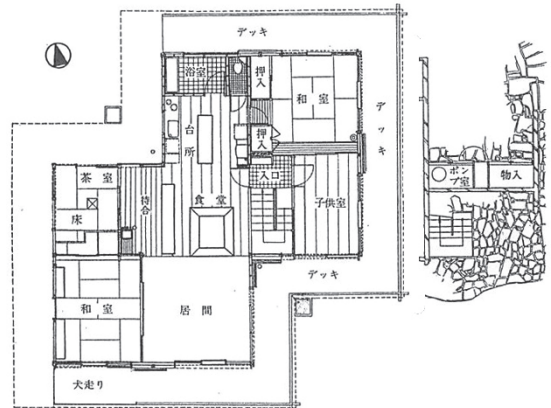


図3 平面図（左：1階 右：地階）

「木村別邸」は、1964年に中原が担当し設計された。スタッフとしての設計担当は、当時設計同人の野呂恒二（1963? - 以下、「野呂」という。）であり、構造担当は、中原と同じ時期に東京大学生産技術研究所池辺研究室（1957-1958在籍）に在籍し、後に坪井善勝研究室に入所した川井満（生没年不明）である。施工は、三善建設株式会社である。

設計を担当した野呂の作品は、農村住宅の将来像として農林中央金庫が日本建築学会と共同して主催した農村住宅設計競技（1966）で1等入選している²⁾。また、「岡部邸」（1963設計）、林雅子（1928-2001 以下、「林」という。）設計の「武蔵野の家」（1963設計）、柿生農協のモデル住宅「飯草邸」（1966設計）、林設計の「入母屋の家」（1967設計）等、設計同人では、多くの農村住宅の設計に取り組んでいる。その後野呂は、大高建築設計事務所に入所し、千葉県立美術館（1979設計）の設計を手掛けている。

「木村別邸」は、1965年4月に着工した。資料によると、この建物の周囲は家もなく、自然の眺めがよいので、壁をできるだけ少なくして眺めたいという建主の希望があった³⁾こと、さらに、周囲の山や谷の具合を考慮して、勾配の角度、居間、和室からの眺め、日当たり、台風の時の風向、車を車庫に入れやすくするなど注意して、はじめの配置よりも20度ばかり西にふり、現場で図面を書き直した⁴⁾との記載がある。

「木村別邸」は、居住者不在の時期は、地元の方がこの住宅の管理をしていた。2012年10月に所有者不在となり差し押さえられた後、不動産業者の手に渡り、2016年6月に現在の所有者が購入し現在に至っている。

設計図書によれば「木村別邸」の施主はK氏で、後に中原が設計を手掛ける「Kビル」(1973)(図4)の施主でもある。雑誌に掲載された「Kビル」⁵⁾の家具の一部が、「木村別邸」に現存していることも確認できた。「Kビル」(鉄筋コンクリート造、地上7階建)は、埼玉県浦和市常盤に建築され、1階が人形販売の店舗、2階は物品倉庫、3階は事務室、4階は会議室等、5・6階は住居となっているが、現存していない。

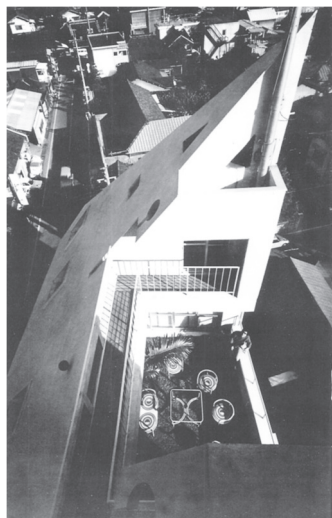


図4 「Kビル」(1973)

2-3 平面計画

「木村別邸」の東側部分の子供室は、子どもの病室としての使用が前提となっており、直接、台所・洗面所・便所などを使いやすい配置に計画している⁶⁾。実際に、玄関入口からは食堂・和室(8畳)・子供室に分岐でき、独立して使用できるようになっている。

基本的に各室は襖で隔てられており、柔軟な住まい方ができるよう配慮されている。外壁の外側には、西側を除き、RC造デッキが廻っており、

開放的な空間となっている。

2-4 構造技術

「木村別邸」の構造について、中原は掲載誌にて次のように述べている。「この建物は、将来内部の使い方が変わることが予想されるので、外構と、内部の間仕切りとを別々につくることが、他の建物と異なっています。(中略)木造で大張間を持たせるためにトラスを用いました。上弦材は木造で、下弦材はプレート(6mm厚の帯鋼)(図5)と木造の合成、それに木材で束をたて、両面から杉板でななめに張った合成トラスを構成しています。(中略)正方形なので中心で交わるわけです(図6)が、その留金物には、図面や、写真でわかるような鉄製の筒をつくってこれに受座を溶接して留めてあります。(中略)庇の部分は、トラスの上弦材をそのまま延ばして、この上に母屋をかけ、桷をかけて屋根を一体に葺き下ろしています(図7)。(中略)柱は、屋根の思い荷重をささえるために、一五センチ角の太いものを用いています。柱が直接トラスの荷重をうけるように、桁を切って上にのばしています。そうすると柱の開きが問題になりますが、柱と柱をつなぐ桁の下端に、十六ミリの鉄筋を通して固めています。」⁷⁾

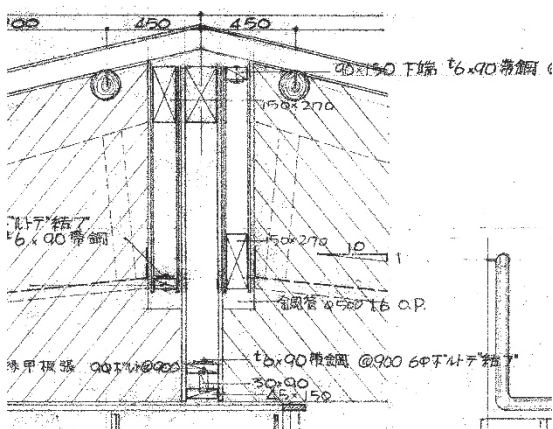


図5 トラス断面図(部分)

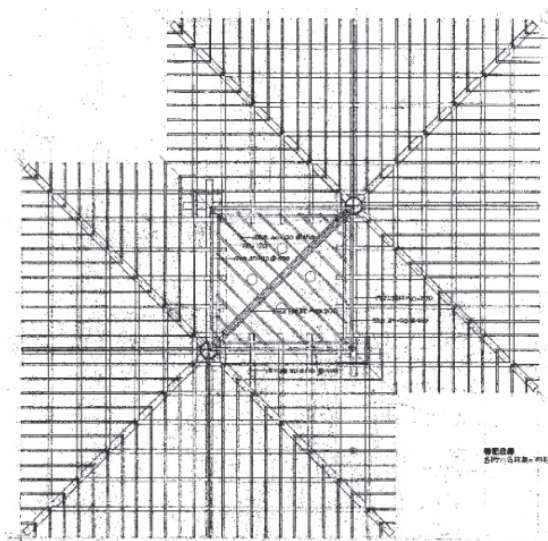


図6 小屋伏図

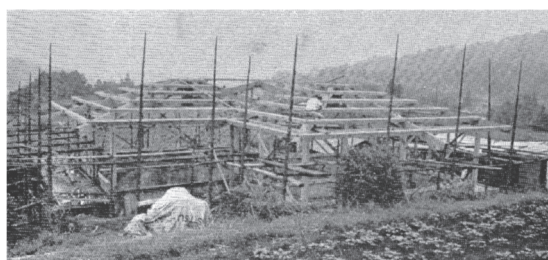


図7 小屋組完了(西側)

このように通風や眺望といった敷地の特性を生かすために、一般的な木構造とは異なる構造を採用し、それが、建築物の内部空間と直結することは、中原が、モダニズム建築家の一人である池辺陽(1920-1979)の下で、住宅設計を学んだことがうかがえる。

2-4-1 天井のトラスと鋼管・引張の線材

外部の柱と八方に組んだトラスで支え、直径500mm厚さ6mmの鋼管によって接続される(図8)ことで、中央の柱がいない広々とした食堂、居間を実現している。将来間仕切りを変えることにも配慮した計画となっている。

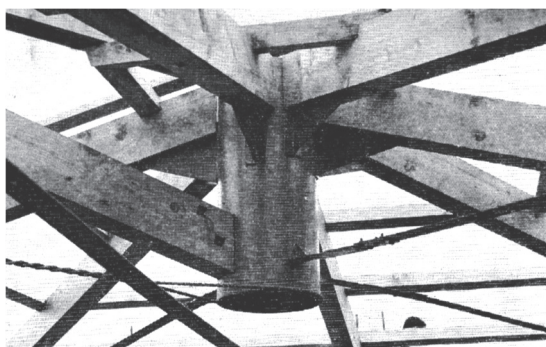


図8 居間上部小屋組みの鉄筒詳細(施工時)

なお、他に中原が設計した構造表現主義的な作品には、屋根にHPシェルを使った「長覚院」(1962)本堂(図9)や「辻別邸」(1964)(図10)がある。「長覚院」の竣工当時は、本堂内部の外陣部分の天井は張らず、HPシェルの構造が内部からも確認できるような設計がされている。「辻別邸」は、外部に露出した形で丸太柱をW型に組み、その間に居住空間が組み込まれている。



図9 「長覚院」本堂のHPシェル屋根(左棟)

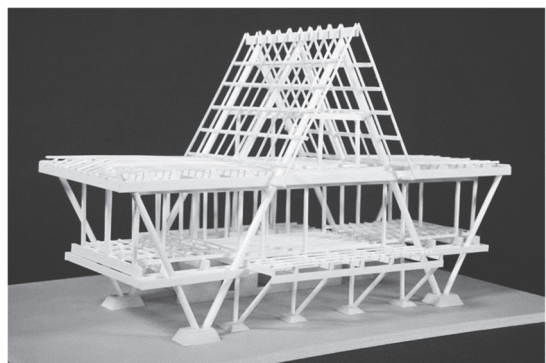


図10 「辻別邸」構造模型

2-4-2 RCと木を併用した基礎と逆スラブ
 「木村別邸」の居間と和室(10畳)及び茶室の床下の外周部は、鉄筋コンクリート(RC)製の壁柱が配されており、逆スラブでデッキを支えている。床の中央は、東石、木材の床束、貫で構成し支えている(図11・12)。傾斜地に建設されたため、基礎をRCとしたと考えられるが、デッキスラブのラインを軽く見せるためにRCと木を併用し、逆スラブを採用したと思われる。デッキ部分は、1,650mmのダブル配筋の片持ち梁で施工されている(図13)。

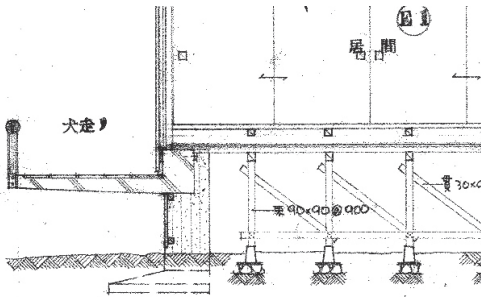


図11 断面図(部分)

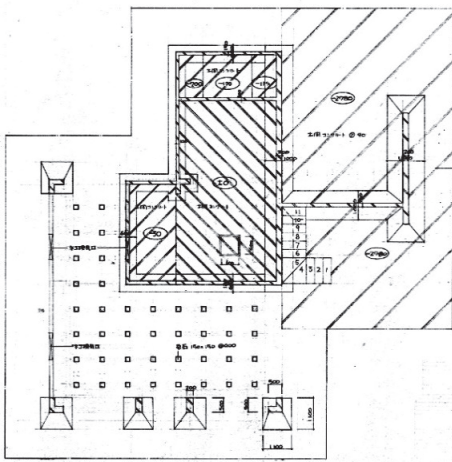


図12 基礎伏図

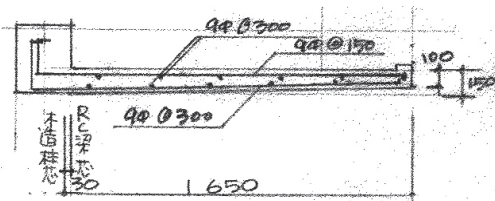


図13 デッキ片持ち梁の配筋詳細

竣工から55年が経過した現状は、基礎や犬走りのデッキ部分にクリープ現象が見られ、基礎の一部が爆裂し、鉄筋が表出している。早急な補修が必要である(図14)。



図14 基礎の鉄筋露出

外周部にRCを中央部に木を使用した基礎の使い分けは、以前中原が設計した「長覚院」(1962)の本堂でも同様に見られる(図15)。「木村別邸」と同様、建築の周りには回廊が廻っている。

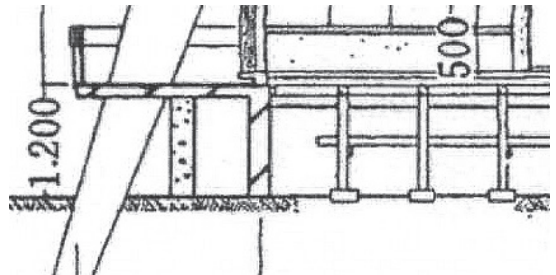


図15 「長覚院」断面図(部分)

2-4-3 トラスの斜め張

中原の初期の作品は、躯体に対し野地板を斜めに張ることで補強しようとする手法が見られる。「岡部医院」(1964設計)では、「火打梁が入れにくいので、屋根の野地板を斜めに張り、2階床も荒床をはやり斜めに張って補強している。」と書いている⁸⁾(図16)。この設計手法は、設計同人を共同で主宰していた同時期の林の作品にもみられるものである。

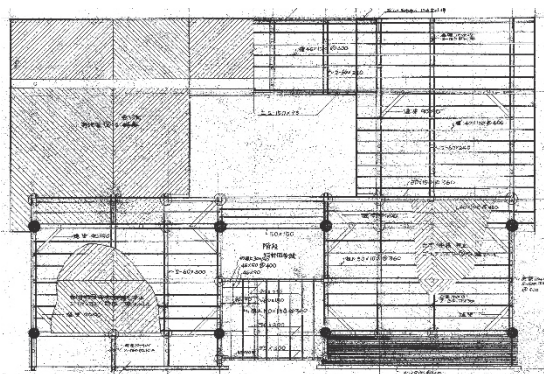


図16 「岡部医院」2階床伏図兼小屋伏図

「木村別邸」では、床ではなく室内から見えるトラスに杉縁甲板の斜め張りが施されている（図17）。

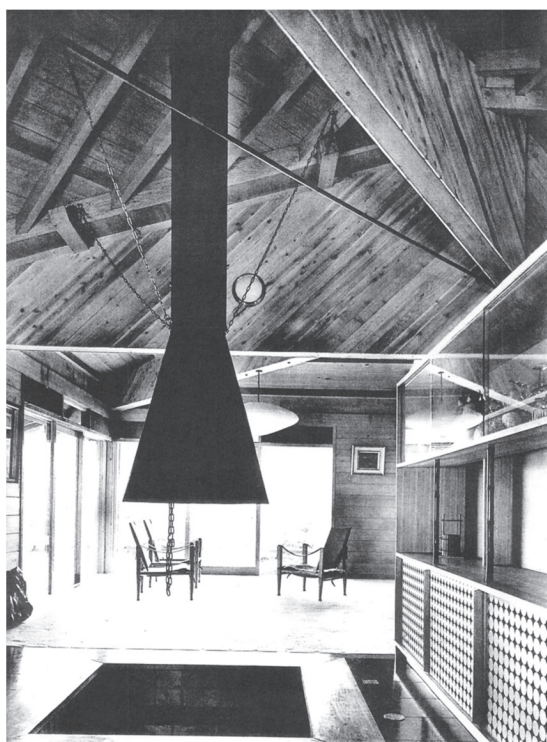


図17 斜め張仕上げのトラス（竣工時）

便所と洗面所間の開き戸上部の垂れ壁は、一面透明ガラスが張られており、トラスを覆う杉縁甲板のつながりを意識したものとなっている。

2-4-4 屋根

「木村別邸」の屋根の仕上げは日本瓦一文字葺き（中央部分は銅板葺き）であるが、中原がそれまでに設計した新築住宅で日本瓦葺きは、「木村別邸」と「吉永邸（通り庭のある家）」（1961.11設計）の2件のみである。中原は、この「木村別邸」竣工後、建築家大高正人（1923-2010）が代表を務める農協建築研究会（以下、「NKK」という）に参加し、設計同人の林、山田初江（1930-）と共に川崎市柿生地区の住宅相談事業において農村住宅の設計に取り組むことになる。この時期に中原が設計した農村住宅は、10軒中6件と半数以上が日本瓦葺きであった⁹⁾。

「木村別邸」で瓦葺きを採用したことは、この後のNKKでの農村住宅の設計にもつながっていったと推察できる。

2-4-5 その他の構造

「木村別邸」の屋根のオーバーラップさせた部分は、銅板葺きで食堂として利用する囲炉裏の排気筒（煙突）と2つの円柱状トップライトが配置されているが、現在は、蓋がされている。暖炉ではなく農村的な囲炉裏を計画することで、人の集まる空間を創出している。囲炉裏の縁は床面と同一面となっており、塞ぐことも想定していたと考えられる。さらに、茶室は、静かな憩いのために構造体とは別に内側に作られている¹⁰⁾。

また、立地が郊外のため、生コンクリートを使用することができず、現場練りをしている。さらに、地上のコンクリート部分を全部一度に打つ予定であったため、朝から打設作業を進めたが、井戸水が足らなくなり、遠い寺から水を運搬したため、夜までかかり打設作業を終えた。そのため、期待していたようなコンクリートが打てず、打ち継ぎが目立つ結果になった¹¹⁾。

将来内部の使い方が変わることが予想されるので、外構と、内部の間仕切りを別々につくるようにしている¹²⁾。

2-5 茶室・水屋

中原は、設計同人時代に15件以上の茶室を設計しているが、「木村別邸」の茶室は、その初期

に設計されたもので、初めての躡り口を設えた小間であった。

茶室の広さは、3畳半で、炉の切り方は四畳半切、床の位置は上座床、勝手は本勝手である。床の間は、床框をつけず、床面を客座の畳と同じ高さとするヤニ松の踏込床である（図18）。床柱、中柱は見られず、形式にとられない簡素なものである。

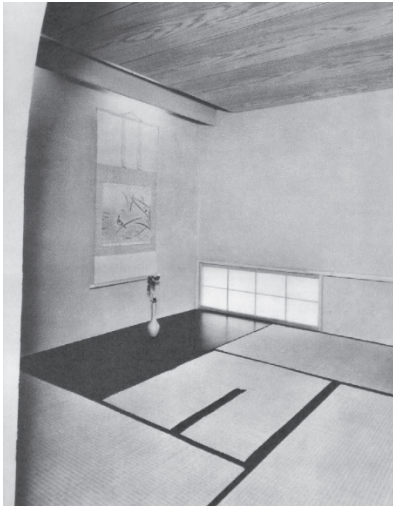


図18 茶室床板とその回り（竣工時）

中原が設計をした「木村邸」設計図一式によると、現物と一部図面との食い違いが見られる。床板の奥行きは、展開図を確認すると奥行き200mm程度であるが（図19）、平面図は、畳の奥行きと同程度のものが床板となっている。つまり、初めは、簡素な床板のない織部床に近い考えで奥行き小さい床板としていたが、蹴込床に設計変更が行われたものと推察できる。

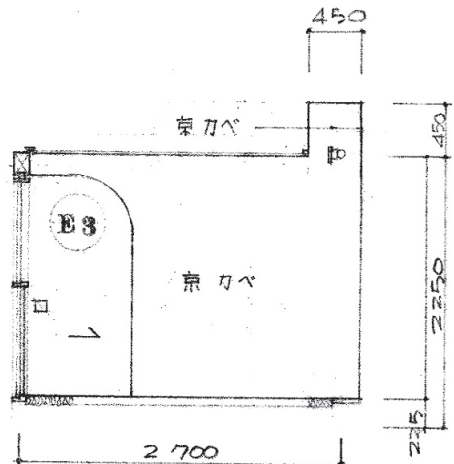


図19 茶室東展開図

茶室の平面データ集成『茶室の解明』によると、そこで取り上げている1,159件の茶室のうち「3畳半は、13件ある中で、「如庵¹³⁾」を含めた「如庵の写し」が8件もあります。このような形の茶室は「如庵」独特のもので、¹⁴⁾と書かれている。「木村別邸」の茶室は、「如庵」のように、板畳はなく、丸畳と同じ大きさの床板が使われている。茶室中央に半畳の炉畳が使われており、板畳は使われていないことから、3畳半という畳数から推察すると、「木村別邸」の茶室は、極めて珍しい平面形状であると言える。

床の間上部は、落とし掛けを付けずに幕板を用いてスッキリとした表現がなされている。幕板の裏には間接照明が仕込まれており、その照明を反射させるために天井の凹み部分に銀箔が貼られ、光を反射させるよう配慮している。床板上部の中央辺りには、掛軸等に対応できるように軸釘が3か所付けられている。

東面の開口部は、壁面を6つに割り、障子や躡り口をはめ込むモダンなデザインが採用されている（図20）。下段は桧縁甲板の躡り口、その横の障子は、外部を眺めることのできるよう、ガラスのはめ殺し窓となっており、上段は、外壁側に突き出すことで開閉が可能となっている。

天井は、杉柰合板で、6mm敷目貼で床の間に対し、垂直に張られている。茶道口上部は、1/4円弧を描いた形状となっている。

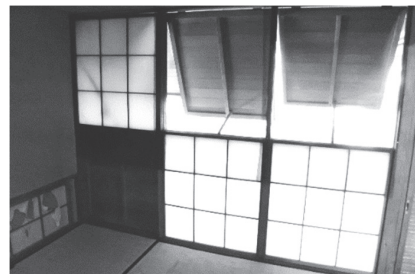


図20 茶室躡り口側壁面

水屋は、待合の一角にコーナーとして設けられており、茶道具や茶器が置かれる3段の棚部分の壁面に板が張られている。水屋袖には、袖格子(竹)であり、左手の上部の壁面には、箱型の照明がある(図21)。



図21 コーナーとしての水屋

露地は、躰り口まで飛び石が配置されており、デッキに続く犬走り部分からアクセスができるように計画されている(図22)。

茶室の東側には、茶道口があるが、その先には待合があり、角には水屋のコーナーも設置されている。待合と水屋を兼ねていることから、客は、待合から露地に出て、躰り口から茶室に入るが、亭主は、客が露地に出た時点で、待合で待機し、茶道口より入るといった動線であると思われる。



図22 躰り口までの露地

建築主夫妻は、茶道を頻繁にはしていなかったようである。現在の所有者へのヒアリングによると、「茶器はきれいな状態で保存されていた。買い取った骨董屋に確認すると、初心者が使う物であったという。また隣地の寺の住職によると、近所の人々を呼んで(茶室で)パーティーを行ったという。」¹⁵⁾ また、文献では「囲炉裏のある部屋が核。茶室が近隣とのコミュニケーションの場」として「木村別邸」が紹介されている¹⁶⁾。本格的な茶道を行う茶室ではなく、近隣のコミュニケーションの場として気軽に使える場として活用されていたことが分かった。

茶室平面より、亭主が茶器を洗う空間である水屋と客が席入りの準備をする待合が兼用されていることから、正式な茶事を行うというよりは、気軽に友人を招きお茶を飲むスペースとして活用されていたと推察できる。そのようなことから、床の間は踏込床にすることで、小間であっても広々と畳部分と一体的に使えるよう、使い勝手の良さを重視したと考えられる。

2-6 設備

「木村別邸」は、竣工時の給湯には、瞬間湯沸器、暖房には、後から温水ボイラー及び温水暖房設備を完備できるようになっている。実際には、居間と和室(10畳)の段差部分に温水床暖房のスイッチあり(図23)、床暖房の増設ができるようにしていた。「車庫のところにボイラーを置いて温水暖房をする計画なのでそのためのスリーブ(配管等のために構造部や躯体を貫通する比較的小さな孔)を入れました。」との記載も残されている¹⁷⁾。

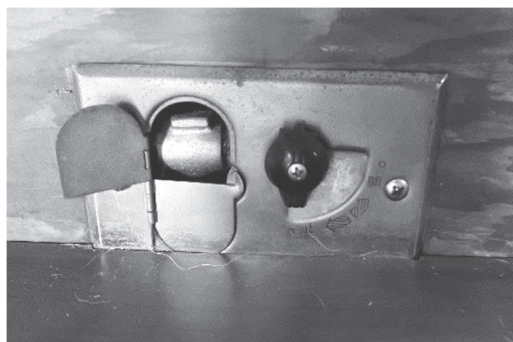


図23 温水床暖房のスイッチ

2-7 装飾

「木村別邸」は、装飾的な部分が多く見られるが、それが、中原の設計意図とするものなのか、竣工後、改修等がされたのかは、現時点では定かではない。しかし、中原の設計した他の作品にも共通点が多く残されている。

家紋（五瓜に九曜紋）（図24）が1階のアプローチの壁面に配置され、背後には照明が施されており、照明点灯時にはこの表（木編に栗）札が浮かぶように設計されている。建築物に家紋を入れる手法は、他の中原設計作品では、後の作品となる「水野レストラン」（1969 設計）でも見られる（図25）。



図24 背後に照明が施された家紋



図25 「水野レストラン」に付されている家紋

玄関吹抜けの手摺柵には、網目状の装飾が施されている（図26・27）。しかし、その形状は、竣工時（図27）とは若干異なるため、後に張り替えられたと思われる。ペンダントライトは竣工時にはなかったが、その後設置されたようである。



図26 玄関ポーチ階段部分（現在）

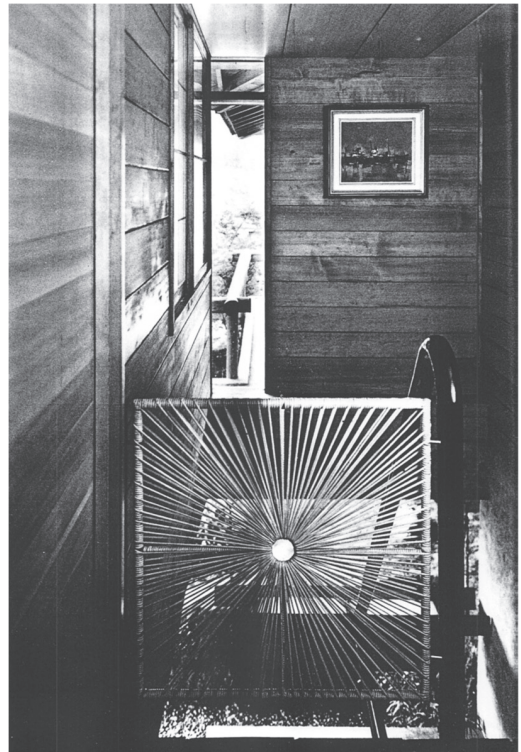


図27 玄関ポーチ階段部分（竣工時）

浴槽には伊豆石が使われ、床面と同じ高さで揃えた埋め込み式となっており、床から天井まで窓が設置され、開放感のある浴室となっている（図28）。



図 28 埋め込み式浴槽

開口部は、風通しの良い環境と周囲の景観を生かすために、「引き違い形式はやめ、1本引両側はめころしで、強度と、視界を保つことにつとめた。」¹⁸⁾との記述がある。居間、病室、寝室の欄間の一部には、防虫網戸付の内転び窓（内倒し窓）があり、不在時も換気が可能となっている（図29）。そのため風通しが非常に良いという¹⁹⁾。その室内側には、木製の雨戸も設置されている。



図 29 居間の欄間窓

建具表を確認すると、外壁に面する開口部は一本引き若しくは上げ下げ窓が多く採用されている（図30）。

階	位置	形式	開口面積	開口高さ	開口幅	開口深さ	開口形状	開口向き	開口用途	開口仕様	開口材料	開口色	開口備考
1	玄関	引き違い	1.1	1200	1800	75	90	40	55	全上	アルミ	白	引き違い
2	居間	引き違い	1.1	1350	1800	75	90	40	55	全上	アルミ	白	引き違い
3	病室	引き違い	1.1	1350	1800	75	90	40	55	全上	アルミ	白	引き違い
4	寝室	引き違い	1.1	1350	1800	75	90	40	55	全上	アルミ	白	引き違い
5	浴室	引き違い	1.1	1350	1800	75	90	40	55	全上	アルミ	白	引き違い
6	廊下	引き違い	1.1	1350	1800	75	90	40	55	全上	アルミ	白	引き違い
7	玄関	引き違い	1.1	1200	1800	75	90	40	55	全上	アルミ	白	引き違い
8	居間	引き違い	1.1	1350	1800	75	90	40	55	全上	アルミ	白	引き違い
9	病室	引き違い	1.1	1350	1800	75	90	40	55	全上	アルミ	白	引き違い
10	寝室	引き違い	1.1	1350	1800	75	90	40	55	全上	アルミ	白	引き違い
11	浴室	引き違い	1.1	1350	1800	75	90	40	55	全上	アルミ	白	引き違い
12	廊下	引き違い	1.1	1350	1800	75	90	40	55	全上	アルミ	白	引き違い
13	玄関	引き違い	1.1	1200	1800	75	90	40	55	全上	アルミ	白	引き違い
14	居間	引き違い	1.1	1350	1800	75	90	40	55	全上	アルミ	白	引き違い
15	病室	引き違い	1.1	1350	1800	75	90	40	55	全上	アルミ	白	引き違い
16	寝室	引き違い	1.1	1350	1800	75	90	40	55	全上	アルミ	白	引き違い
17	浴室	引き違い	1.1	1350	1800	75	90	40	55	全上	アルミ	白	引き違い
18	廊下	引き違い	1.1	1350	1800	75	90	40	55	全上	アルミ	白	引き違い
19	玄関	引き違い	1.1	1200	1800	75	90	40	55	全上	アルミ	白	引き違い
20	居間	引き違い	1.1	1350	1800	75	90	40	55	全上	アルミ	白	引き違い
21	病室	引き違い	1.1	1350	1800	75	90	40	55	全上	アルミ	白	引き違い
22	寝室	引き違い	1.1	1350	1800	75	90	40	55	全上	アルミ	白	引き違い
23	浴室	引き違い	1.1	1350	1800	75	90	40	55	全上	アルミ	白	引き違い
24	廊下	引き違い	1.1	1350	1800	75	90	40	55	全上	アルミ	白	引き違い
25	玄関	引き違い	1.1	1200	1800	75	90	40	55	全上	アルミ	白	引き違い
26	居間	引き違い	1.1	1350	1800	75	90	40	55	全上	アルミ	白	引き違い
27	病室	引き違い	1.1	1350	1800	75	90	40	55	全上	アルミ	白	引き違い
28	寝室	引き違い	1.1	1350	1800	75	90	40	55	全上	アルミ	白	引き違い
29	浴室	引き違い	1.1	1350	1800	75	90	40	55	全上	アルミ	白	引き違い
30	廊下	引き違い	1.1	1350	1800	75	90	40	55	全上	アルミ	白	引き違い

図 30 建具表（部分）

玄関を振り返ると、南側外壁に縦長のスタンドグラスがある。設計図によると、5mmの透明ガラスと書かれており、掲載誌でもスタンドグラスは確認できなかったため、竣工時には無かったものと思われる。このスタンドグラスは、幾何学的な模様が表現されている（図26）。

軒の先には、装飾的な吊下げ灯籠が数箇所、吊られている（図31）が、この吊下げ灯籠も図面には書かれていない。



図 31 軒下の吊下げ灯籠

アプローチ部分には、漢詩が刻まれた木碑があるが、設計図、施工写真からも確認できないことから、竣工後に設置されたものと思われる（図32）。

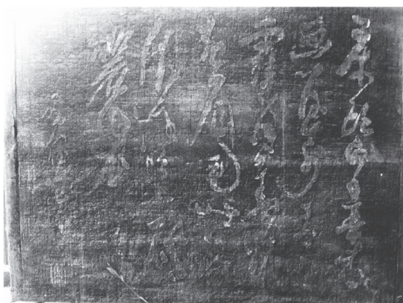


図 32 漢詩が刻まれた木碑

3. 考察

中原にとって池辺研究室所属当初から和風（伝統）と機能主義をいかに扱うかは、設計上の中心課題であった。博士論文²⁰⁾では中原の独立後の設計思想の展開を4期に分け、第1期は機能主義、特に構造表現主義的傾向が強い時期として捉えた。代表的な作品は「長覚院」（1962）、「辻別邸」（1964）及び「木村別邸」（1966）である。しかし、「木村別邸」についてはこれまで実地調査ができていなかったが、今回幸運にもこの機会を得、新たな発見をすることができた。

その結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 「長覚院」、「辻別邸」は、外部に構造を露出しているが、「木村別邸」は、屋根トラスを瓦で覆い、その構造は、内部のインテリアの一部として露出している。建物の周囲を廻るデッキは、逆スラブで小口を薄く見せ和風テイストを演出している。
- 2) 内部空間には囲炉裏を設け、これを食事空間としている。後に林が多用する囲炉裏タイプの暖炉（図 33）とは全く異なり、伝統的な

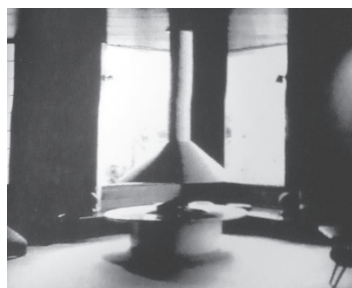


図 33 林設計の囲炉裏風暖炉

囲炉裏自体を再現し、生活の中心としている。

- 3) 茶室は当初、織部床の近代的茶室として設計を進めていたが、実現したものは3畳半で、床柱のない踏込床で、あまり類例のない茶室となった。
- 4) 細部の装飾には、家紋、吊下げ灯籠、木碑等といった「伝統的な和風の要素」をそのままの形態で各所に配置し、その機能や形態から発想した新たなデザインを行わず、それを装飾空間として存在させた。

以上のように、第1期の「長覚院」、「辻別邸」と「木村別邸」の間には大きな差異があり、和風と機能主義を融合させる様々な野心的な試みがあったことが確認できた。伝統的な形態そのものを近代建築に持ち込み設計するよう変化していった理由の一つに、この間に「長覚院」の図面を携えてパリでのインターンアーキテクトとしての経験が、日本に対する意識をより強くさせたことが推測されるが、これを明らかにするのは今後の課題としたい。

4. 謝辞

本論文の執筆において、コロナ禍にもかかわらずご協力くださいました横澤ご夫妻、合同会社 Mot Design の本山千絵様に多くのご助言をいただきました。また、本学名誉教授の杉本茂先生に深く感謝いたします。

引用文献等

- 1) 平成 24 年度女性アーカイブセンターの企画展示で、当時当模型は、女性就業支援センターが所蔵していたが、その後東京家政学院大学が保管をしている。なお、この模型の筋違は省略されている。
- 2) 農協建築研究会：農村の住まい。pp.110-113（農林中央金庫組合金融推進部、東京、1967.9）野呂は、鈴木清史（小崎建築設計事務所）と山田尚義（匠設計事務所）と共同でこのコンペに出展している。
- 3) 中原暢子：施工の過程を追う。室内 133：71（1966.1）
- 4) 中原暢子：施工の過程を追う。室内 133：67（1966.1）
- 5) 中原暢子：K ビル。建築文化 29：127-130（1974.3）
- 6) 中原暢子：中原暢子の木造住宅設計図集。p.1（1999）
- 7) 中原暢子：施工の過程を追う。室内 133：70-72（1966.1）

- 8) 中原暢子：岡部邸（合せ梁・真壁）. 木造の詳細 1 構造編. p.20 (彰国社, 東京, 1968.2.10)
- 9) 深石圭子：建築家・中原暢子の生涯における主要な作品と設計思想に関する研究. p.111 (2021.3)
- 10) 中原暢子：中原暢子の木造住宅設計図集. p.1 (1999)
- 11) 中原暢子：施工の過程を追う. 室内 133:69 (1966.1)
- 12) 中原暢子：施工の過程を追う. 室内 133:70 (1966.1)
- 13) 「如庵」は、愛知県犬山市にある国宝の茶室であり、織田信長の実弟、有楽の作と言われる。現在は、名古屋鉄道株式会社の所有となっている。
- 14) 根岸照彦：茶室の解明 平面データ集成. p.122 (建築資料研究社, 東京, 2001.11.10)
- 15) 現在の所有者へのヒアリングによる (2021.10.18)
- 16) 中原暢子：囲炉裏のある部屋が核。茶室が隣とのコミュニケーションの場。新感覚のセカンドハウス. p.144 (講談社, 東京, 1990.5.10)
- 17) 中原暢子：施工の過程を追う. 室内 133:69 (1966.1)
- 18) 中原暢子：K 別邸. 住宅建築 14:66 (1976.6)
- 19) 現在の所有者へのヒアリングによる (2021.10.18)
- 20) 深石圭子：建築家・中原暢子の生涯における主要な作品と設計思想に関する研究. pp.243-244 (2021.3)
- 図 9：中原暢子：「H.P. シェルと伝統の融合 天台宗長覚院」. 建築文化 192:73 (1962.10)
- 図 10：中原設計の図面をもとに筆者が作成した構造模型
- 図 11：中原暢子：「木村邸」設計図一式 107 断面図 1964.10.12 を一部抜粋
- 図 12：中原暢子：「木村邸」設計図一式 114 基礎伏図
- 図 13：中原暢子：「木村邸」設計図一式 118 構造詳細図
- 図 14：筆者撮影 (2021.10.18)
- 図 15：中原暢子：「H.P. シェルと伝統の融合 天台宗長覚院」. 建築文化 192:74 (1962.10)
- 図 16：中原暢子：「岡部邸」設計図一式 17 床伏図 2 階・小屋伏図 1 階
- 図 17：中原暢子：木造でシェルターをつくる「木村別邸」. 建築文化 240:119 (1966.10)
- 図 18：中原暢子：特集 一軒の家ができるまで トラス構造の家. 室内 223:64 (1966.1)
- 図 19：中原暢子：「木村邸」設計図一式 108 展開図
- 図 20：筆者撮影 (2021.10.18)
- 図 21：筆者撮影 (2021.10.18)
- 図 22：筆者撮影 (2021.10.18)
- 図 23：筆者撮影 (2021.10.18)
- 図 24：筆者撮影 (2021.10.18)
- 図 25：筆者撮影 (2021.03.16) この家紋は、中庭にある井戸の屋根の矢切部分にある。
- 図 26：筆者撮影 (2021.10.18)
- 図 27：中原暢子：K 別邸. 住宅建築 14:64 (1976.6)
- 図 28：筆者撮影 (2021.10.18)
- 図 29：筆者撮影 (2021.10.18)
- 図 30：中原暢子：「木村邸」設計図一式 112 建具表より抜粋。外壁に面した開口部の形式は、一本引き若しくは上げ下げ窓の記載が多く見られる。
- 図 31：筆者撮影 (2021.10.18)
- 図 32：筆者撮影 (2021.10.18)
- 図 33：「建築家 林雅子」委員会編集：クロスプランの家, 建築家 林雅子 HAYASHI MASAKO architect 1928-2001, p.187 (新建築社, 東京, 2002)
- (受付 2022.3.25 受理 2022.6.30)

図版リスト

- 図 1：中原暢子：木造でシェルターをつくる「木村別邸」. 建築文化 240:116 (1966.10)
- 図 2：「下呂山の家」縮尺 50:1 設計同人が作成したものと思われる。現在は、本学にて保管されている。
- 図 3：中原暢子：木造でシェルターをつくる「木村別邸」. 建築文化 240:118 (1966.10)
- 図 4：中原暢子：中原暢子住宅 3 題「K 別邸」. 建築文化 14:127 (1974.3)
- 図 5：中原暢子：「木村邸」設計図一式 111 矩計詳細図 1964.10.12 を一部抜粋
- 図 6：中原暢子：「木村邸」設計図一式 116 小屋伏図 1964.10.12 を一部抜粋
- 図 7：中原暢子：施工の過程を追う. 室内 133:71 (1966.1)
- 図 8：中原暢子：施工の過程を追う. 室内 133:72 (1966.1)